

English Garden 第54話

"I sha'n't be gone long. - - You come too."

Robert Frost

「すぐ帰ってくるんだから - - きみも来たまえ」
ロバート・フロスト

皇后陛下美智子さまは9月21日、インドのニューデリーで開かれた国際児童図書評議会 (IBBY)世界大会のビデオによる基調講演で、「子供の本を通しての平和」と題して子供時代の読書の思い出を語られました。テレビで視聴された方も多いと思います。私は皇后さまと同年ですので、疎開生活中の読書のお話や、そのころ日本語で読んだ詩の原詩(ロバート・フロストの "The Pasture" 「牧場」)と大学で再会されたお話などに、特に深い感銘を受けました。

美智子さまが皇太子さま(当時)と婚約されたころ、私は有楽町のオフィスに勤めていましたので、新聞社などが集まっていた駅周辺、ご婚約発表当日のフィーバーぶりをいまでも思い出します。夕刊や号外を貼った看板が駅前から主要道路にそってびっしりと並べられ、号外が舞っていました。それらの新聞の中でひときわ目を引かれたのが、"A Commoner To Be Crown Prince's Bride" (平民が皇太子妃に)という英字新聞の大見出しでした。皇族と平民とのあいだには、まだまだ大きな開きがあった時代でした。

国民から歓呼の声で迎えられた皇太子妃が人格と知性を磨かれ、40年後に「日本の母」と呼ぶのにふさわしいお姿を見せられたのは、本当に嬉しいことでした。

ご講演の中で「喜びを与えてくれた作品」として引用された「牧場」は次のような短い詩で、表題の1行はそのリフレインの部分です。

The Pasture

I'm going out to clean the pasture spring;
I'll only stop to rake the leaves away
(And wait to watch the water clear, I may)
sha'n't be gone long. - - You come too.

I'm going out to fetch the little calf
That's standing by the mother. It's so young
It totters when she licks it with her tongue.
sha'n't be gone long. - - You come too.

牧場(阿部知二訳)

牧場の泉を掃除しに行ってくるよ。
ちょっと落ち葉をかきのけるだけだ。
(でも水が澄むまで見てるかも知れない)
すぐ帰ってくるんだから - - 君も来たまえ。

小牛をつかまえに行ってくるよ。
母牛(おや)のそばに立ってるんだがまだ赤ん坊で
母牛(おや)が舌でなめるとよるけるんだよ。
すぐ帰ってくるんだから - - 君も来たまえ。

何気ない状況をうたった詩ですが、何ともいえないさわやかさ、やさしさが伝わってきます。親しい人に語りかけたものなののでしょうか。美しく紅葉した林の泉の落ち葉をかきのけている詩人の姿や、母牛になめてもらっている生まれたばかりの小牛を見守る詩人の顔、そのような愛情の溢れた光景が鮮やかに目に浮かびます。私は大学の英詩の授業でこの詩に出会い、音読したときの快い響きとイメージの美しさに「英詩っていいなあ!」と思ったものでした。英詩のファンとなるきっかけを作ってくれた作品の一つです。阿部知二の訳は、皇后さまも言及していただけるように、原詩の味わいをよく伝えていきます。

いま読み返してみると、詩人は、毎日あくせくして余裕を失っている私たちに、「すぐだから、君も来たら」といたずらっぽく笑いかけているようにも思えます。日常の生活の中でもちょっと立ち止まってみると、すばらしいものが見つかるのかもしれない。

ロバート・フロスト(1874-1963)は アメリカ精神を伝えた国民詩人と呼ばれ、北東部のヴァーモント州の農場に住んで、ニューイングランドの自然やそこに生きる人びとの生活をリアルに描きました。ピューリッツァ賞を4回受賞しています。

